

民族衣装姿の女性を前に、少々照れ気味の男の子。アットホームな雰囲気には理由がある。

伊豆諸島南端の東京都青ヶ島村は人口200人足らずの「日本一小さな自治体」。写真は、全校生徒数27人の青ヶ島小中学校で行った国際交流会のひとつまで、JICA国際協力出前講座の「出前先」だ。

「国際理解教育を本校で始めて今年で8年ですが、正直、中身を充実させることより島に来てくれる講師を探すのに「苦労」と剣持利行副校長は本音を漏らす。羽田空港から八丈島まで飛行機で45分＋ヘリで20分と聞けば近く感じるが、「ヘリは一度に9人しか乗れないし、八丈島 青ヶ島間の船の就航率は5割を切る」。これまで講師探しを教職員のつてに頼ってきたが、それだけでは限界がある。悩んだ末JICAに相談し、昨年は東ティモールなどの研修員ら3人の派遣にJICAが協力した。

今年もマーシャル諸島で活動した元青年海外協力隊員の鳥飼恵美子さんとベトナムからの留学生リィ・クン・チーさんが来校。初日は2人がそれぞれの国の歴史や暮

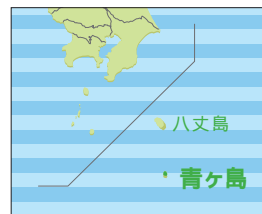
Close Up!

ジャイカのアシあと

【青ヶ島村】

自立心を育てる 国際協力出前講座

全校生徒がわずか27人の東京都青ヶ島村立青ヶ島小中学校。元青年海外協力隊員とベトナム人留学生の訪問は、子どもたちにとって新しい価値観との出会いだった。



文・写真 = 今村 健志朗
text & photo by Kenshiro Imamura



らしぶりなどを映像や歌で紹介、また鳥飼さんはマーシャル諸島の体験を語った。翌日は子どもたちが青ヶ島や両国について調べてきたことを発表。出前講座は時間や生徒の数の都合により講師からの一方通行になりがちで、写真のように攻守交代し、講師が聞き役になるシーンは意外と少ない。

学校の教育目標は「自立」。島に高校はなく子どもたちは中学校卒業後、島を出て自立せざるを得ないからだ。行き先の多くは内地（本州）。先生は「内地の子より自立が早い反面、人にもまれていないのが心配」と口をそろえる。元隊員で現在青ヶ島村役場に勤務する掛田進哉さんは「途上国で暮らし、価値観の多様性を痛感した。他人を認めることで自分も認められる。外国人どころか知らない人にさえ接する機会が少ない島の子どもたちにとって、交流会はいい練習になる。できることがあれば協力したい」と語る。内地だけが世界ではない。青ヶ島も海で世界へつながっている。子どもたちがさまざまな人や価値観に接しながら「自立」していくことを願う。